

JACT 誌 5 卷 卷 頭 言

「 相 補 ・ 代 替 ・ 伝 統 医 療 と EBM 」

東 京 女 子 医 科 大 学 名 誉 教 授

阿 岸 鉄 三

相 補 ・ 代 替 ・ 伝 統 医 療 は ， 現 代 科 学 的 医 療 と は 異 な る 適 応 状 態 で 有 用 と 考 え ら れ ま す が ， 現 代 の 日 本 に お い て は ， い ま だ い わ ゆ る 日 の 目 を 見 る 状 態 に は な っ て い な い と い う べ き で し ょ う 。 日 の 目 を 見 る ， す な わ ち ， 一 般 的 医 療 と し て 普 及 す る に は ， 医 療 保 険 適 用 と し て 支 払 い が 認 め ら れ る こ と が 望 ま し い と 考 え ら れ ま す 。 あ る い は ， 現 代 科 学 的 医 療 と 比 較 し て 一 般 的 に 高 額 な 医 療 費 は か か ら な い の で ， 医 療 保 険 と の 併 用 ， す な わ ち 混 合 診 療 と し て 認 め ら れ る こ と が 次 善 と い え ま す 。 相 補 ・ 代 替 ・ 伝 統 医 療 と み な さ れ る な か で ， 鍼 灸 な ど は ， 公 的 に は 正 統 的 医 療 と は 認 め ら れ て お ら ず ， 特 定 の 病 的 状 態 に 対 す る 医 業 類 似 行 為 と 分 類 さ れ て い る だ け で す 。 し た が っ て ， 相 補 ・ 代 替 ・ 伝 統 医 療 が 仮 に 混 合 診 療 の 体 系 の 中 で 認 知

されるためには正統的医療の中に含まれることが前提条件ということになりましょう。一方では、厚生労働省は、医療とは EBM (evidence-based medicine) でなければならないという立場をとっています。経験主義を捨て、科学的証拠に基づいた医療であるべきというのです。これは、極めて重大で、難しい問題のように見えます。相補・代替・伝統医療の多くは、いまだ科学的証拠に乏しいとされるものです。したがって、非科学的とされるものが多いのです。科学的とは、非科学的なものを排斥する本性があるという人がいます。科学的立場から相補・代替・伝統医療を評価すると、科学的とみなされている医療に対するよりも一般に厳しい評価結果を出す指摘されています。ところが、開き直って、科学的であることの定義を要求すると、一般には、客観性・普遍性・再現性・論理の一貫性が提示されます。では、現在行われている現代科学的医療は、この要件に適合するものばかりかという

疑問がわきます。厳密な客観性を求めると、精神科は成立しないことになりましょう。多くの精神病は、脳における客観的病変である組織学的変化とは対応しないのです。同じ病名の患者でも、治療に対する反応・経過・予後は異なり、普遍性のある治療法など存在しません、などなど。近代科学の創始者の1人とされるニュートンの最大の功績は、引力を2つの物体間に本来備わった性質であるとしたことであるという人がいます。形・重さと同じように扱うとします。これを、科学とは前提条件を追求しないと表現する人がいます。これにならって、精神活動は脳の機能として本来備わったものという人がいます。科学的とはそのようなものなら、気功は人間に本来備わった機能という見方をすれば、気功だって科学的ということになります。これこそ、論理の一貫性と考えられます。ところが、このような論理は一般的には受け入れられないのです。何か直観的に排除したい心理が働くようなのです。理詰めを超え

た何かがあるようなのですが、それが何であるかは、不明と言わざるを得ません。その「何か」を説明することが、相補・代替・伝統医療と現代科学的医療を本当の意味で統合する鍵になると考えられます。しかし、現実的には、相補・代替・伝統医療を科学的に評価することができなければ、厚生労働省的医療として認知される可能性はふさがれてしまうこととなります。本当は、科学的手段で相補・代替・伝統医療の効果を評価することは、全く当てはまらない物差しを用いて計測することになり、無意味なはずですが、それでも、なにやら計測した結果を表明発表することは、ニュートンが引力は物体間に備わった本性とした無理やり、強引に通した論理と同じともいえます。これは、まったくの私的見解です。